

巻頭言

集合居住に対応した住宅計画と 住宅部品の開発を

日本女子大学 教授 小谷部 育子



はじめに

住宅の工業化が進み、空間構成部材から設備機器まで、高まるユーザーのニーズに対応して住宅部品はますます多様化し進化し続けている。利便性、安全性、快適性はもちろん、健康、バリアフリー、省エネルギー、サステナビリティ、セキュリティ、ファッション性と住宅や住宅部品に求める性能も高まるばかりだ。一方、住宅に対するニーズはそこに住む家族のかたちや住まい方、そして住まいのかたちと切り離せない。都市化が進み、わが国においても集合住宅居住がごく一般的になってきた。近年は、都市の利便性や職住近接を求めて高齢者世帯や共働き世帯の都心回帰の傾向がみられる。しかし、どうも私たちは本来の集合居住の価値と作法をまだ身につけていないように思える。従って、現在の住宅および住宅部品は、集合住宅か戸建て住宅かに係わらず、また家族の規模や生活スタイルに係わらず、基本的には1世帯自己完結型生活に対応したもののみになっているのではないか。生活の個人化が進む社会のなかで、人も物も自己完結型住戸という箱から開放し、集まって住むことの価値を享受できる集合居住のための住宅計画、それに対応した住宅部品の開発が期待される。

「住宅部品業界への要望」という課題をいただいたが、ここでは、スウェーデンでの集合住宅の居住経験とコレクティブハウジングの研究・実践活動をおして集合居住の価値を創出し享受する住まい方と集合住宅計画について述べることによって、住宅と住宅部品開発のあらたな領域を示唆することを目的とする。

ストックホルムにおける集合住宅体験

もう15年近く前になるが、1年間のストックホルム暮らしを経験した。1年のうち最初の3ヶ月は、1930年代の3階建てレンガタイル張りの公共賃貸住宅で、

暖房・給湯システム以外は近代化改修がされていない2居室住戸(約36m²)を借りた。夏2ヶ月は築100年の旧紡績工場を改造した彫刻家のアトリエ住居に、そして残り7ヶ月は1960年代に建設された居住権所有(CO-OP)の集合住宅で2居室住戸(約50m²)に住んだ。その後、1992年から10年ほどはコレクティブハウジングの継続研究のため、毎年、夏の2、3週間をストックホルムで過ごすことになり、90年代はじめに都心の国鉄用地再開発で建設された事業型住宅協同組合によるCO-OP住宅の3居室住戸(約85m²)を定宿とした。最新のスタンダードのキッチンユニット、オール電化、24時間換気、外断熱3重ガラスのサッシ、広いバルコニー、そしてオートロック、バリアフリーなど、最新仕様のアパートメントである。ここで住戸のN居室という呼び方は、キッチン、バスルームの他に居室がN室あることを示している。また、キッチンは一般的に食事スペースも含むので、日本的には2DK、3DKと思えばよい。ただしN居室のうち1室は居間であり1942年以来、公的融資の対象となる住宅は居間としての最小居室面積や推奨面積、寝室としての最小居室面積に関する規定が設けられてきた。キッチン、バスルーム、衣装収納の最小面積も同様である。

建築年代の異なる3タイプの集合住宅の居住経験をとおして、1930年代には西ヨーロッパの先進諸国と比較しかなり低水準であった住宅事情が、戦後1946年から48年の間に整備された今日につながる住宅政策により、現在ではヨーロッパの中で最も高い居住水準を誇る国の一つとなったプロセスを身をもって体験したことになる。

1970年代の居住運動に始まり1980年代以降、CO-OP住宅や公共住宅の一メニューともなってきたコレクティブハウジングの研究はじめ、この実際の居住体験をとおして、都市における集合居住の作法が住居計画研究、住宅設計、供給・運営、住まい手、それぞれの立場に共有され、評価・改善、新たな試みが積み重ねられてきたことが理解できた。

集合居住の住宅計画と暮らしの作法

ストックホルムで体験した集合居住の作法とは何か？

協同居住を目的にしたコレクティブハウジングは勿論であるが、一般の集合住宅でも集合することにより可能な、あるいは必要になってくるコモン空間の位置づけと装備、それらを楽しむ暮らしである。

ヨーロッパの集合住宅では、洗濯・乾燥設備の整った共用のランドリーがあることは一般的である。古くは技術上の制約や経済性も共同化の要因であったかも知れない。1930年代の集合住宅では隣棟の半地下に広い洗濯室があり、かつて使っていた20cm厚一畳ほどの石盤が乗った大型プレスラーが置いてあり驚いた。また1住戸ぐらいの広さの乾燥室が現在も機能している。新しい集合住宅ではランドリーは明るい窓のある地上階にあり、大型の洗濯機、乾燥機が住棟規模にもよるがそれぞれ数台と毛布やカーペットなども乾せる大型乾燥ボックス、マンゲルという電動のシーツプレスラーなどが装備されている。一般的に管理会社によって維持管理されているが、居住者はランドリーの鍵を持っており無料で使用できる。まとめ洗いをすることになるが使い慣れると、無くてはならないものになる。各住戸で家庭用洗濯・乾燥機を持ちそのためのスペースとエネルギーを個々に消費するのに比べ、共用のランドリーは住棟全体でみると明らかに合理的、経済的であるに違いない。また、共用のスペースや設備を日常的に使いあうことでルールを大切にしたり気配りをしたり自然と住コミュニティの一員であることを意識するようになる。

その他、公共住宅でもCO-OP住宅でも集合住宅には必ず各住戸用の集合トランクルームがある。生活スタイルの違いもあるが、概して住戸内に物があふれていない。CO-OP住宅では共用のサウナやサロンなどがあり組合員である居住者にとって負荷価値となっている。特殊なコモンスペースとしては、地下に核シェルターがあるのはお国柄である。

協同居住を目的にしたコレクティブハウスはさらにコモンスペースが充実し、集合居住のメリットを最大限に生かした住宅タイプといえる。一般的に各住戸スペースを基準から10～15%縮小し、コモンスペースの面積を生みだすのだが、コレクティブハウジングは自立と連帯のある協同居住に価値を置く居住者たちが選択し、自ら維持運営をする集合居住のかたちである。公共住宅でもCO-OP住宅でもコレクティブハウスの申請により住戸規模の最低基準を縮小することが認められる。コモンスペースの内容や規模は世帯数や立地、居住者の協同居住への期待等によりプロジェクトごと

に特徴があるが、多目的に使える大きな食堂や居間、木工や織物、陶芸、楽器演奏のための部屋やゲストルーム、キッズルーム、サウナ、ライブラリー等、がよく見られる。コレクティブハウスのランドリーは大概庭に面し、忙しい住人たちの息抜きであり出会いの場となっている。

そして、コレクティブハウジングの核といわれる、コモンミール(ウィークデーの夕食運営の共同化)の舞台となるコモンキッチン(空間、設備ともにもっとも感動するところ)である。コモンキッチン用に開発されたシンクや数種類のヒーター、フライヤー、高さが調整できる調理台等が組み込まれたアイランド形の装置は、プロ仕様の調理器具を組み込みつつアットホームで数人での調理がワクワクするデザインである。また大量に焼いたり煮たり蒸したりできるコンビオープンも必需品である。豊かな共用室や設備、共用庭をそれぞれの日常の生活領域の一部として使い分け、自分たちで維持管理することにより経済性や合理性を超えて人も空間も相互に育ちあい、個人生活に新しい可能性が生まれ、安心と楽しみ、そしてエコロジカルな住コミュニティを形成している。「個人の生活はシンプルに、社会的な生活は豊かに」がコレクティブハウジングを選択する人たちの価値観である。

一方、住戸の装備とはいうと、一口にいうと非常にシンプルでかつ住居としての基本性能レベルがとても高いということである。まずキッチンであるが、新しい定宿にしていた3居室住戸の場合、DKの広さは12m²程度。シンク、オープン、レンジ、レンジフードがビルトインされた上部戸棚付きL型の調理台部分と大型冷凍・冷蔵庫、収納キャビネットが1壁面が構成されているコの字型のキッチンシステムが備え付けられている。ごくスタンダードの装備であるというが、住宅部品はモジュールが統一されているので異なるメーカーでも食洗機や電子レンジの組み込みでもシステムの組み換えでも可能という。コレクティブハウスの場合は主にキッチンと居間の面積が縮小されるので、多少コンパクトになるがキッチンシステムの仕様は基本的に同じである。収納は3居室住戸では2.5m²の衣装収納が最低基準とされており、ウォークインクローゼットの場合が多いが、可動の600×600mmキャビネットが7連以上という形で装備されているケースもある。地下の集合倉庫とあわせて1住戸あたり7m²の収納が基準といわれている。住戸内は24時間換気されており、暖房・給湯熱源は地域の供給システムで必要最小限の端末のみが住戸内にある。また、ガラス窓は大きな開口部でもブラインド組み込みが標準仕様のひとつである。冬の室内温度設定は18℃から20℃程度と低めであるが、住棟のエントランスから階段室、室内のトイレやバスルームに至るまでほとんど温度差がな

いので住棟内の動作にストレスを感じずきわめて快適である。

さて、このような集合住宅での暮らしがイメージできただろうか。気候も文化も異なる北欧の話ではあるが、暮らしを支える質の高い機能・性能が備わった集合住宅の住戸内は概してシンプルで、居住者それぞれの個性的な好みやライフスタイルをかもし出している。木の素材を活かした北欧家具は美しい。またスウェーデンはDIYショップの大手イケアの本場であり、DIYで自分好みのインテリアを楽しむ人が多い。バルコニーや窓辺は暮らしの外部への発信場所でもあり、共用のランドリーや集合倉庫は単に便利さだけではなく、住棟内での生活行動と意識の領域を広げコミュニティセンスを生み出す存在となっているように思われる。

都市的環境の中でコレクティブハウジングは、特に小さな子どもがいる共働きや片親世帯、社会的関心の高い中高年の単身や夫婦のみの世帯に支持されている。生活者による居住運動としての側面があるが、1980年代以降には公共住宅の1メニューとしても取りくまれるようになった。子ども天国のコレクティブハウス、熟年のコレクティブハウス、エコロジーをテーマにしたコレクティブハウスなど、新築だけでなく既存ストックのリノベーションでも、暮らしの価値を共有する居住者の参画と協働により多様な取り組みがある。

集合居住に対応した住宅計画と住宅部品の開発を

若年層から高齢層まで、単独世帯や夫婦だけの世帯が増加し、情報化の進展や生活支援サービス産業の発達もあいまって生活の個人化が進んでいる。阪神淡路大震災や中越地震など、近年の大きな自然災害ごとに避難や生活再建、まちの復興にコミュニティの力の重

要性が指摘される。また防犯や子どもの安全、環境問題等、地域の日常的な住環境問題に対する住民による取り組みがメディア等でクローズアップされる一方、住まいはますます閉鎖的になり、人気のない家やまちをセキュリティーシステムで防備する傾向も進んでいる。

このような社会的背景のなかで、わが国でも近年、住まい方や住まいづくりにおいて、個人の自立した自由な生活を享受しつつ、より安心・安全で可能性に満ちたものにするために、住まいやまちづくりの新しい取り組みが注目されるようになった。個人や小さな世帯で閉じられた自立自助あるいはさまざまな生活支援サービスへの依存に対して、生活者自らの意思と選択で集成的な取り組みをすることにより、より合理的で納得のできる、そして精神的にもリラックスできる自立共助の暮らしの価値に対する認識の高まりといえる。2003年には、東京にも北欧型の本格的なコレクティブハウスが実現した。多世代、多様な世帯で構成される28世帯の居住者は試行錯誤ながらも1週間3回の夕食の協同運営を核として、豊かなCOMMONスペースや設備をそれぞれの生活領域として享受し、そこでの暮らしの価値を見せてくれている。

しかし、住宅設計とコミュニティデザインを統括する手法の難しさは勿論であるが、それだけでなく現在の関連法規や事業システムの中でこのような集合住宅を成立させるには、まだまだバリアーが大きい。プライベートとパブリックの間、個人使用でもなく営業用でもなくCOMMON利用の空間や設備類の機能や維持管理の仕様およびデザイン、など中間領域を成り立たせるハード・ソフトの要素を私たちはまだ手に入れていない。

質の高いシンプルな住戸と個人の暮らしの領域と可能性を広げる豊かなCOMMON空間を組み込んだ、集合居住の住宅計画と住宅部品の開発が求められている。

